

補註ならびに翻訳後記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 金沢大学人文学類考古学研究室 公開日: 2025-06-30 キーワード: 作成者: 大谷 育恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/0002002956

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



補註ならびに翻訳後記

■訳 1

長沙晋墓とは、金盆嶺 21 号墓。やや縦長の磚室墓で、壁に沿って多数の俑が出土し、「永寧二年五月十日作」磚を伴っていた（次頁参考図 1）。註 28 で言及のある現在最も古い時期の片鐙を表現した俑についても、併せて掲載しておく。

■訳 2

この 2 本の論文は林俊雄によって掲載図も含めて全文が邦訳されており、下記の本に収録されている。訳出にあたり訳者見解も含めた註も付されているので、参照されたい。

林俊雄編訳 1988 『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』（馬の博物館叢書）（財）馬事文化財団。

- ・I. L. キズラソフ「鐙の起源について」：3-18.
- ・A. K. アムブロズ「編年基準としての中世初期（4～8 世紀）の鐙と鞍」：19-42.

なお、本稿では基本的に力点を置かない表記をとっているため「アムブロズ」としたが、力点を置いた読みとした場合には力点は A の上にあるため、「アーンブロズ」であるらしい。

■訳 3

註でサヴィノフほかが異議を唱えていることを付記しているが、上記の林翻訳 [1988: 6] も異議を唱えている。キズラソフが言及する鐙の図を再掲すると、左図のとおり踏込部が幅広の 8 字形鐙であり、3 世紀と見なす考えは否定されている（参考図 2）。

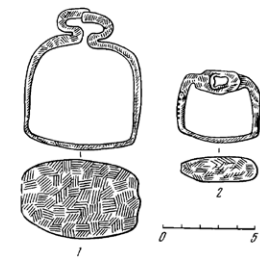


Рис. 5. Модели тангутских стремени III в. из Хакасии (по Л. Р. Кызыласову), железо

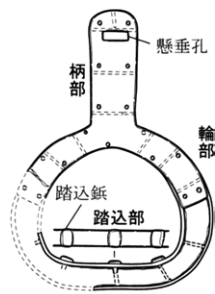
参考図 2

なお、鐙の部位の名称については、木芯金属板張輪鐙を例にとった諫早 [2012: 7 図 2] に従って訳出した（参考図 3）。

諫早直人 2012 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣。

■訳 4

朝鮮半島と日本の古墳が挙げられているのである



【木芯金属板張輪鐙】

参考図 3

が、東アジアでの実物の鐙資料の現状を示すために、諫早の東北アジア出土馬具の製作年代図 [諫早 2020: 295 図 3] を示しておく（次頁参考図 4）。なお、下の 1980 年代ヴァインシテインの研究に言及した部分で「安陽 154 号十六国期墓」とあるが、これは参考図 4 の「孝民屯 154 号墓」であり、現在も年代が推定できる最も古い実物の鐙である。

諫早直人 2020 「三燕の金工品と倭の金工品」『東アジア考古学論叢Ⅱ：遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究』（奈良文化財研究所学報 98）奈良文化財研究所・中国遼寧省文物考古研究院：293-312.

■訳 5

ネステロフの論文に掲載されている図を再掲する（参考図 5）[ネステロフ 1988: 174, рис 1,2]。クディノヴァが圭形直柄の鐙と言っているのはタイプ 1 の左の鐙であり、柄部の先端が丸みを持って尖るものである（圭とは中国の玉器の 1 つで、細長い長方形の一端が尖って細長い五角形のような形をしたものである）。そして、有柄頸鐙と言っている鐙はタイプ 1 の右の鐙である。

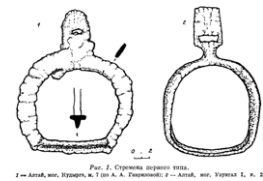


Рис. 2. Стремля первого типа. 1 — Анка, мот. Кизил, м. 1 (по А. А. Рыбаков); 2 — Анка, мот. Урмас 1, м. 2

タイプ 1
（左：圭形直柄鐙，右：T 字形柄鐙）

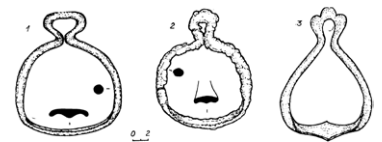


Рис. 2. Стремля второго типа. 1 — Ува, мот. Козьм, м. 47 (по С. М. Вайсшнейдер); 2 — Алгай, мот. Кызарт, м. 15

タイプ 2（8 字形鐙）

参考図 5

懸垂孔のある部分が横に張り出した方形であり、その下に輪部に伸びる柄の形状をとって T 字形柄鐙とも呼んでいる。

■訳 6

象山西側にある同墓地では、11 基の墓のうち 7 基から墓誌が出土し、琅琊王氏の墓地であることが分かるが、象山 7 号墓からは墓誌や紀年磚は出土していない。報告時に王廙墓とされたのは、報告者が 7 号墓を東晋前期であることは疑いないとし、墓の年代と規模を元に史書中の条件に合う人物を探してのことである。かつて訳者がガラス容器を集成した際にも、報告者の年代観をとった [大谷 2022: 24-25]。クディノヴァは師の林梅村の説を付記しているが、これも先に 7 号墓の年代を劉宋期とし、3 人の被葬者を劉英媛（劉宋文帝第六女，臨川長公主）、駙馬の王藻、呉崇祖かと推測している。劉宋

墓とみる理由は、①墓の形と規模、②馬俑の鐙が短柄横穿型鐙であること、③ダイヤモンド象嵌指輪、④ガラス杯を挙げている。象山7号墓の馬俑は双鐙を表現した最古の例であり（参考図6）[岡村2021: 326, 図4.18]、その年代の検討は重要である。大谷育恵 2022 「東アジアで出土したガラス容器資料（集成Ⅱ：三国～北魏並行期）」『金大考古』81, 金沢大学人文学類考古学研究室: 22-58.

岡村秀典 2021 「第4章3節 騎馬術の革新」『東アジア古代の車社会史』臨川書店.

■訳7

クディルゲ墓地にはテュルク期の墓とモンゴル期の墓があり、前者クディルゲ類型の墓は20基あり、13基の墓から鐙が出土している。うち、踏板断面がT字形の鐙はこの7号墓出土の鐙のみとみられる（報告では2点の鐙のうちクディノヴァが表1-4左に示した実測図の1点のみが掲載されている。右の写真の鐙は柄部の先が破損しており、もう一方の鐙であろうか）。

なお、ガブリロワは鐙を4タイプに分類しており、この鐙は珍しい鐙としてタイプⅣに分類されている（タイプⅠ：8字形鐙、タイプⅡ：頸部のない柄部が長方形の鐙、タイプⅢ：頸部のある柄部が長方形あるいは台形の鐙、タイプⅣ：特異な形。すなわち



東呉 建衡 3年 [271]
丁奉夫婦合葬墓 俑

西晋 永寧 2年 [302]
金盆嶺 21号墓 俑

参考図 1



南京象山7号墓出土の鞍馬俑（岡村撮影）

東晋初期 象山7号墓 俑

参考図 6

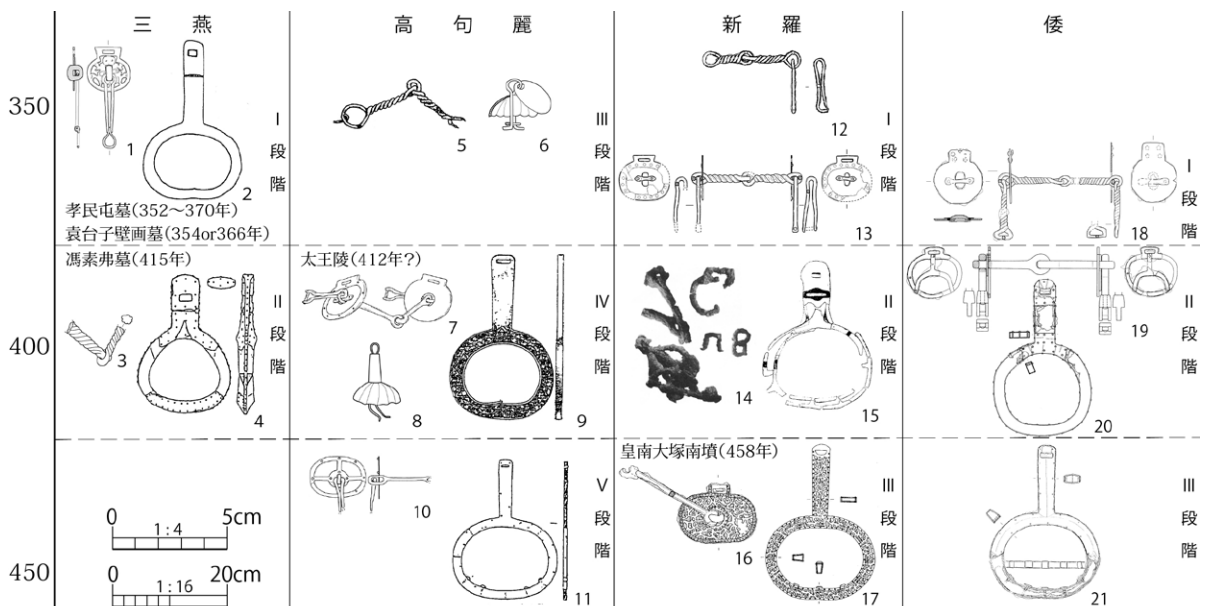


図3 東北アジア出土馬具の製作年代 (S=1/16, 6・8は1/4)

- 1・2: 孝民屯154号墓 3・4: 馮素弗墓 5・6: 禹山下3319号墓 7: 七星山96号墓 8・9: 太王陵
10・11: 万宝汀78号墓 12: 煌城路20号木槨墓 13: 月城路カ-13号墳 14・15: 皇南洞109-3・4号墳
16・17: 皇南大塚南墳 18: 行者塚古墳 19・20: 七観古墳 21: 瑞王寺古墳

参考図 4

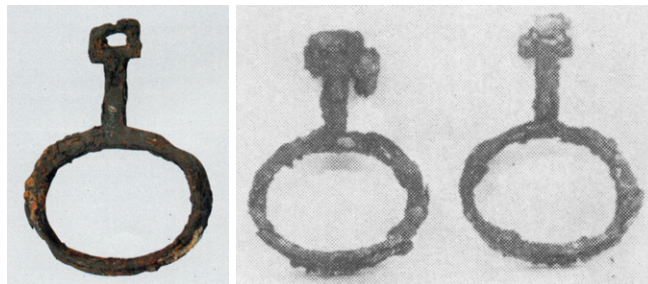
頸部のない長方形の柄部で、幅広の板で製作され、上部は平たく圧延されており、踏込部として断面 T 字形の踏板を持つ。)[ガブリロワ 1965: 34]。また、1つの鞍に異なるタイプの鐙が付いていたと考えられる例があることを指摘しており、タイプ I と II の組み合わせ (22 号墓)、タイプ I と III の組み合わせ (9 号墓) を挙げている (すなわち、一對のうち片方が 8 字形鐙というセットが存在する)。そして、このような例はクディルゲ墓地だけでなく、タイプ I・II の組み合わせがモンゴル国のナインテ - スム [ボロフカ 1927: 図版 IV - 36, 37、トゥバ [ヴァインシテイン 1958: 図 122, 123] でも見られると指摘している。これは鐙の使用のされ方に関する重要な指摘である。

Боровка Г. И., 1927, Археологическое изучение среднего течения р. Толы, Северная Монголия II), Л: Изд-во АН СССР: 43-88. [ボロフカ G. I. 「トウラ川中流の考古学調査」『北モンゴル II』]

Вайнштейн С. И., 1958, Некоторые итоги работ археологической экспедиции ТНИИЯЛИ, 1956-1957 гг., Ученые записки Тувинского научно-исследовательского института языка, литературы и истории, вып. IV, Кызыл. [ヴァインシテイン S. I. 1957 「1956~1957 年トゥバ科学研究言語・文学・歴史学研究所考古調査団の成果」『トゥバ科学研究言語・文学・歴史学研究所学術報告 IV』]

■ 訳 8

固原市の北魏墓出土の鐙というのは、参考図 7 右の 2 点の鐙である [韓孔楽・韓兆民 1984: 53, 図 26]。サーサーン朝のペーローズ 1 世貨が出土しており、484 年以降に築造された墓と推測される。なお、論文中で言及されていないが、柄部先端の柄頭部が柄部幅よりも大きく突出した方形で、長い柄を持つ同様の鐙は司馬金龍墓で 1 点出土している



北魏 太和 8 年 [484] 司馬金龍墓 鉄鐙
北魏平城期 484 年以降 固原北魏墓 鉄鐙

参考図 7

[諫早 2012: 262]。参考図 7 左には訳者が知っている最も古い撮影年になる写真を掲載したが [『文物與收藏』2007-3: 41, 図 10]、近年撮影された写真を見ると、その後懸垂孔が拡大しているようである。なお、司馬金龍墓の鐙も展示されていたが、2023 年 7 月から内蒙古博物院を皮切りに中国各地を巡回した鮮卑をテーマとした特別展『融合之路：拓跋鮮卑遷徙與發展歷程』では、参考図 8 の鐙も北魏として展示されていた。

■ 翻訳後記

2023 年の秋、大谷と諫早は西北大学が発掘調査している陝西省旬邑県の西頭遺跡上廟地点とその 39 号墓から出土した遺物を調査する機会があった。概要については日本考古学協会で口頭報告したが [諫早ほか 2024: 40]、クディノヴァ論文の表 1-19 として掲載されているように、この墓からは鐙が出土していた。比較研究のためには漠北から南シベリアにかけての地域で出土した初期の鐙について知る必要があり、クディノヴァ著「欧亚草原的馬鐙—蘇聯和俄羅斯学者有関馬鐙起源與早期馬鐙研究的概述」(「ユーラシア草原の鐙—ソビエト連邦ならびにロシアの研究者の鐙起源と初期鐙研究に関する概述」) の翻訳を企画した。クディノヴァ氏に打診したところ、『文博』2019-2 に公表してから年月が経っているので、資料を追加して中国語で原稿を送りたいとのことであった。日本人読者にとってはロシア語地名の中国語漢字音表記は理解しにくい面があるため、全文を邦訳した。旧ソ連圏における鐙の研究の歩みと現状を知るための一助としていただきたい。

諫早直人・大谷育恵・李曉健・豆海峰 2024 「陝西省西頭遺跡上廟地点 39 号北魏墓出土馬具の提起する問題」『(一社)日本考古学協会第 90 回総会 研究発表要旨』日本考古学協会。(訳者)



内蒙古自治区鄂爾多斯市徵集 内蒙古博物院藏 青銅製鐙

参考図 8